

反則と性善説

年末から年始にかけて、高校、大学、トップリーグなど多くの試合が行われました。

以前と違って、反則数が一桁の試合が多くなったことは、常識的で正当なことです。以前には反則数が20以上で勝利チームという恥ずかしい試合もありました。

昨年、コラムで高校大会決勝で反則が僅か一つとというチームのことをとりあげましたが、最近の反則減少傾向はまことに喜ばしいことです。数の多い原因についてレフリーを批判する無法者が減ったということでしょう。

プレーの連続とスピードで優位に立つことに努力する姿勢はよく見られますが、変化やトリックプレーで相手の想定外の作戦を展開するケースがもっとあれば、もっと面白くなるのと思われる場面が数多くありました。each side で相手の想定外のプレーにより交わしとして相手を突破する場合、策としての「だまし」dummy は悪いことでないのは正当なことです。そして no side になれば、友情と信用の性善説の世界です。ダミーパス、チェンジオブペース等々いろいろな組プレーで相手を翻弄する作戦も痛快なものです。

建築物の強度偽装が社会の大問題となっています。こんな悪い人がいることを悲しく思い性悪説について考えさせられます。詐欺行為をして「法を破ることは考えていなかった」と図々しく言い逃れしようとする人がいるものです。

スポーツはルールを守って性善説を基盤にスポーツマンシップを体して行うものです。本来的に反則は少ない方がよいのです。「ルールギリギリ」のプレーが問題になることがあります。ルールギリギリのプレーをして反則の判定をうければ、間違いなく反則なのです。レフリーの判定に問題があるのではありません。ギリギリはあくまでも反則を取られない限度内であることが条件です。ルールの歴史に見られるペナルティキック導入の経緯は、罰は少ない方がよいという意味が教示されています。アドバンテージローは反則に対する罰を善意で処理する大切なものです。

勝つことを目的とすることは当然なことですが、反則をとられても、得点に関係なければ平然として、不満顔や不要な質問さえ見られます。反則を誘導する行為は反則であり、認定トライのルールや、故意にタッチヘ手で投げ出しては反則というルールに流れる意味を忘れてはならないのです。このようなルールの意図を真剣に受け止めてペナルティを減らすというルール以前の姿勢が問われています。「畑うつや法三章の札の元」という故事に習って、ルールに対する姿勢から自問自答することもラグビーを楽しむのに無駄ではないでしょう。The History of the Laws の序文にある、1855 年ある作家がスコットランドで行われた試合について言った次の言葉は、勝利至上主義に陥没し性善の自分を見失ってしまっている指導者やプレーヤーに有益な警鐘であると思います。

"It was not a bad game; the greatest beauty of it was that there were no rules."

ラグビーが発展・普及していく過程で、ルールが細部に渡り数多くなりました。地球上多くの人がいいるところからラグビーを楽しむのですから、約束ごととも複雑になったことは自然な流れですが、ルールを生かす文化を発展させることの必要性が痛感されます。

2006.01.21

西川 義行